



ご本人の希望として、家族や友人との外食などを目標とされる方も居るかと思いますが、介護支援専門員の仕事をしていく中で、直接本人に支援して頂く専門職の力で、ご本人の意向に近づけることができると感じる事が多いです。

新宿食支援研究会（以下「新食研」）に参加する機会となったのは、当社の所長が、自身の事例で勉強会に参加したヘルパーさんの実践を目の当たりにし、私にこの会を勧められたことでした。

その勉強会では、心臓病で食事が摂れず、血中酸素が83%まで低下していた低酸素状態の方を、訪問看護が集中的に毎日訪問をすることになったという事例です。口腔ケアで最期まで口から食べる大事さの話が勉強会で聞いたヘルパーさんが、翌日からのケアで歯を磨くなどの口腔ケアを行った結果、ご本人は茶碗蒸しとゼリーを食べることができるようになりました。もっと食べたいとの訴えをご家族が止めてしまったので、ヘルパーさんは所長に連絡し、所長が新食研に参加している他のヘルパー事業所にもつないで毎日のように同じケアをしてもらうことになりました。ご家族も協力され、訪問看護の手厚いケアも重なり、後にご本人は食欲が戻り、血中酸素も93%まで戻りました。おかげで連日の訪問看護対応も普段の対応になったのです。

今後も専門職の方と共に、ご本人の意向に近づく支援を行いたいと思います。

(介護支援専門員 安西 和之)

「座る」を考える

② 「座る」と5mmの大切さ

皆さんの靴は足のサイズに合っていますか？おそらく、ほぼ合っていると思います。靴が足よりも5mmの大小のズレがあると、その日の疲れが変わってきます。また、サイズが合わない靴を履き続けたら膝が痛んだり、歩行がおかしくなったりします。5mmのズレだけで身体に大きな影響力を持っているのです。しかし、椅子や車椅子では「5mmの大切さ」が認識されていません。

皆さんが普段見かける椅子や車椅子の規格は、日本の工業規格において、約170cmの方が座って丁度良いサイズになっています。この規格は、ほとんどの高齢者や、また、一般の女性が座っても合わない規格なのです。もし、何も工夫しないで椅子や車椅子に高齢者が座った場合、「本来、座ることができない場所」に座らされ、「座ることができない」という評価を下されてしまいます。本人が椅子や車椅子に座れないのではなく、椅子や車椅子が本人に合っていないのです。

自分に合わない椅子に座ることは、合わない靴で日々過ごすことと同じこととなります。靴で言う「膝が痛い」は、椅子や車椅子では「お尻が痛い」、同じように、靴で言う「歩き方がおかしくなる」は、椅子や車椅子では「姿勢が悪くなる」という表現になります。常に「椅子の5mmを考える」というのが、車椅子を専門に取り扱う「シーティングエンジニア」なのです。

(福祉用具専門相談員 栗原 俊介)

在宅で管理栄養士がどんな結果を出せるのか

薬樹薬局飯田橋 薬剤師
矢作 さくら

在宅療養者がますます増えていく中で、在宅での栄養管理は必須です。在宅での栄養管理を担うのは管理栄養士に他なりません。

管理栄養士は、医療保険・介護保険それぞれで訪問栄養指導を実施出来ます。対象疾患は様々で、需要は摂食嚥下障害やがん、糖尿病やその他慢性疾患、小児疾患など、多岐にわたります。そこで管理栄養士が適切な栄養スクリーニングを行い、療養者に寄り添った栄養ケアを実施します。訪問栄養指導の強みは、個々の療養者の生活スタイルに応じた栄養ケアを提供できることです。どこのお店で何を買うか、何をどれくらい召し上がるか、何が好きか嫌いか、ご本人とご家族は栄養面で何に困っていて、どうしていきたくて考えているか。あらゆる観点からアプローチします。結果として数字に現れてくるのは、栄養摂取量の変化に伴う体重変化や血液検査値の改善。数値以外では、食事の楽しみの向上や介護者の負担軽減、生きる喜びに繋がります。

しかし、未だ管理栄養士による訪問栄養指導は少ないのが現状です。全国で1ヶ月

間に算定されている居宅療養管理指導のうち、管理栄養士によるものはわずか5,000件(平成29年4月)程であることが分かっています。ほんの一握りの在宅療養者しか、管理栄養士による栄養ケアを受けていないのです。



食支援に栄養管理は欠かせません。ではなぜ、在宅分野で訪問栄養指導が広まらないのか? その課題を解決しようと発足したのが、E-KEKKA委員会といワーキンググループです。テーマはずばり、「管理栄養士が在宅でどのような結果を出せるのかを、見える化する!」です。訪問栄養指導が広まらない要因は様々挙げられますが、私たちが注目したのは「医師が、訪問栄養指導の実態を知らないからではないか」という点です。

そこで私たちは、結果の見える化を報告書に落とし込み、栄養摂取状況と体重の推移をグラフ化し「結果が一目で分かる」報告書アプリを作成しました。訪問栄養指導が広まるきっかけになることを願います。

